

家庭環境が子どもに与える影響とその対処法

1190473 齋藤 和希

高知工科大学経済・マネジメント学群

1. 概要

文化施設に子どもを連れて行く行動を親が取っている場合ほど子どもの学力が高い、蔵書数（漫画や雑誌、教科書、参考書、子ども向けの本を除いたもの）の多い家庭の子どもほど学力が高い、世帯年収が高いほど子どもの学力が高い（世帯年収がある程度の高さになると直線的な関係を示さなくなる）など、家庭環境と子どもの学力についての関係性は、これまでも多くの先行研究によって示されてきた。そこで、本研究では、学校（本研究では小学校および中学校に限定）や塾（本研究では個別指導塾に限定）といった教育現場で実際に見られた、家庭環境が子どもの学力に与える影響とそれぞれに対する対処法をインタビュー調査した。そして、それぞれの家庭環境が子どもの学力に与える影響に対する対処法として成功したもの、失敗したものを整理し、どのような対処法がより好ましく、何を自分自身の今後の人生に活かしていくべきなのか模索した。

2. 背景

家庭環境と子どもの学力が関係していることは、これまでも多くの研究によって指摘されてきた。また、家庭の社会経済的背景と子どもの学力との間に密接な関係があることも、近年の国際学力調査の分析などに基づけば、もはや国際的な常識といってよい。かつて、先進国では学力に対する家庭背景の影響が強いのにに対し、開発途上国では学校要因が学力に強く影響していると論じられたこともあったが、近年の研究では開発途上国における家庭背景の影響力も決して弱くはないことが実証されている¹。平成29年度に実施された学力調査の結果と、その対象となった小学6年生および中学3年生の子どもたちの保護者に対する調査の結果を関連づける調査報告書がある。家庭環境と子どもの学力の関係についてはさまざまな傾向が明らかになっている。例えば、「子どもと一緒に美術館や劇場に行く」、「子どもと一緒に博物館や科学館に行く」、「子どもと

一緒に図書館に行く」など文化施設に子どもを連れて行く行動を親が取っている場合ほど、子どもの学力が高いことが示された（表2-1）。

また、家庭の蔵書数（漫画や雑誌、教科書、参考書、子ども向けの本を除いたもの）の多い家庭の子どもほど学力が高いことも示されている。小学6年生のデータをみると、蔵書数が0～10冊の家庭の子どもよりも11～25冊の家庭の子どもの方が学力が高い。それよりも26～100冊の家庭の子どもの方が学力が高い。さらに101～200冊の家庭の子どもの方が学力が高い。201～500冊の家庭の子どもの方が学力はさらに高く、501冊以上の家庭の子どもの方が学力がもっとも高い。中学3年生でも、まったく同じ傾向がみられた。だが、蔵書数は親の社会経済的背景と関係しているのではないかと考えるのが妥当である。社会経済的地位の高い親の家庭ほど、つまり学歴や収入が高い親の家庭ほど蔵書数が多くなっている。そうすると、家庭の蔵書数の多いことが子どもの学力を高めているわけではなく、親の学歴や収入の高さが子どもの学力を後押ししているということになる。

しかし、そういうわけではなく、社会経済的背景を統制しても、家庭の蔵書数と子どもの学力は関係している。つまり、学歴や収入の層が低くても、高くてもそれぞれの層のなかでは、蔵書数が多い家庭の子どもほど学力が高いという傾向にあるということである。そうすると、家に本をたくさん置いておけばよいのかということになるがそうではない。

蔵書数の多い家庭の子どもほど学力が高いという傾向、そして文化施設に子どもと一緒に出かける親の子どもほど学力が高いという傾向を合わせると、親自身の知的好奇心の強さが子どもの学力に影響していると考えられるべきである²。

他にも、世帯年収の高さに学力が比例しているという結果も出ている。しかし、中学校3年生では「年収1200～1500万円」世帯の生徒の平均正答率が、「年収1500万円以上」世帯に比べ

¹教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書

URL:https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kyoiku_kakusa/2008/kyoiku_kakusa_Chapter2_01.html
(2019年2月6日最終検索日)

²学力の高い子ども、親の習慣や家庭環境に「共通の傾向」…文科省調査で判明

URL:https://biz-journal.jp/2018/10/post_25094.html
(2019年2月6日最終検索日)

て、国語A・B、数学A・Bのすべてで上回っているように、ある程度の高さになると、「年収と学力」が直線的な関係を示さなくなる³。

そこで本研究では、今後自分の身の周りで起こり得る事に対する対応の参考にするために、学校や塾といった教育現場で実際に見られた事例をもとに家庭環境と学力の関係性を調査するとともに、それぞれに対する対処法を調査しようと考えた。

	国語			算数		
	A層	D層	差	A層	D層	差
博物館や美術館に連れていく	37.9	22.0	15.9	34.4	20.7	13.7
ほとんど毎日、子どもに「勉強しなさい」という	51.2	56.9	-5.7	49.5	56.8	-7.3
毎日子どもに朝食を食べさせている	93.2	82.8	10.4	91.0	81.8	9.2
子どもの勉強をみて教えている	59.7	58.8	0.9	57.4	58.5	-1.1
子どもを決まった時間に寝かすようにしている	85.3	78.9	6.4	83.3	79.0	4.3
家には、本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある	72.6	48.0	24.6	67.3	52.4	14.9

表 2-1 家庭環境と子どもの学力の関係（文献[1]をもとに著者が作成）

3. 目的

本研究では、家庭環境と学力の関係性を事例から調査するとともに、それぞれに対する対処法を調査する。これらの調査を通して、今後の自分の身の周りで起こり得る事に対する対応のしかたとしてどのような方法があるのか明らかにするとともに、より好ましい方法を模索する。

4. 研究方法

はじめに、文献調査を通して、家庭環境と子どもの学力の間のような関係性があるのか整理する。次に、先行研究で挙げられている家庭環境と子どもの学力の関係性も踏まえて、現役の学校教員および個別指導塾の講師の方々（教員3名、塾講師2名）に、実際に家庭環境が子供の学力に与える影響をインタビューするとともに、それぞれに対してどのような対応をし、その結果どのように状況が変わったのかをインタビューする。最後に、インタビューによって得られた家庭環境と子どもの学力の関係性およびそれに対する対処法を整理し、より好ましい対処法を模索していく。

5. 結果

実際に見られた家庭環境が子どもの学力に与える影響およびそれぞれに対する対処法について、小学校教員、中学校教員、個別指導塾の講師を対象にインタビュー調査を実施した。そのインタビュー調査によって得られた、家庭環境が子どもの学力に与える影響を5つに分類しそれぞれに対する対処法を模索する。

5.1 親が片親かどうか

まず1つ目は、親が片親かどうかということによる影響についてである。職業柄、夜に家を空けることになる場合、子どもの家での過ごし方を見ることができず、家庭学習の未提出や生活習慣の乱れにつながるという。生活習慣の乱れにおける具体的な例としては睡眠不足や朝食が不規則になることが挙げられた。家庭学習の未提出によって、授業の復習ができなかったり授業内容が定着しなかったりするといった悪影響が出るだろう。また、生活習慣の乱れによる睡眠不足や朝食が不規則になることは、授業に対する集中力の欠損につながる。このような事例に対して、まずは本人に生活習慣を正すよう促すという。具体的な方法としては、就寝時間、起床時間、朝食を摂ったかどうかの確認、授業中や休憩中など学校で眠そうにしていないかに注意して様子を見たという。それでも改善されない場合や対象の生徒が低学年の場合は保護者の方にも協力してもらい、就寝時間、起床時間、朝食と段階を踏んで改善していき、最終的には家庭学習の提出、授業に対する集中力の向上を図る。この方法で2件の成功事例があった。

一方で、片親で夜に家を空ける場合でも、祖父母が子育てに関わることで生活習慣の乱れを防げたという例も挙げられた。また、片親だからこそ子どもが親を助けようという思いから国公立大学を目指し、塾での1コマの授業に対する意識を高くもったり家庭学習の時間を自ら確保したりと良い影響を与えることもあるという。や

³国立大学法人お茶の水女子大学,2018,『保護者に対する調査の結果と学力等との関係の 専門的な分析に関する調査研究』,p13-22

URL:http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afeldfile/2018/07/10/1406896_1.pdf
(2019年2月10日最終検索日)

はり授業に対して意識を高く持って臨むかどうか、高い集中力を持って臨むかどうかでは、その後の学力の伸びに大きな影響がある。これは私自身の塾講師のアルバイト経験からみても明確に感じることができた。生徒の年齢によってこのような意識の芽生えには個人差があるが、いかにこのような意識を持たせられるよう援助するかが重要だと考える。

5.2 親の言動の不一致

2つ目は親の言動の不一致についてである。子どもに対して「勉強しなさい」と言う親が、それを言いながらテレビを見ていたりスマートフォンを使用していたりすると、子どもは勉強する気にはなれないという事例が挙げられた。そのような状況が続くと、最終的に1つ目で述べた家庭学習の未提出につながる。その生徒に実際に「なぜ勉強する気になれないのか」と聞いてみると、「勉強しないといけないのはわかるが、テレビを見たりスマートフォンを使用したりしながら言われると、自分も勉強より好きなことをしたくなるし、自分は嫌なこと（勉強）をするのに、好きなことをしながら言われると腹が立つ。」と言っていた。勉強することが嫌であることを改善できれば解決できるが、まずは勉強するよう促す方法を改善すべきである。このような状況が続くようだと保護者の方に、子どもに勉強するよう伝えるときだけでもテレビを見たりスマートフォンを使用したりするのを止めてもらうよう促すという。その結果子どもの家庭学習の時間が増え、学力の向上につながったという事例がみられた。

一方で、テレビを見たりスマートフォンを使用したりするのを止めて勉強するよう言っても、学習時間は以前と変わらず学力が伸びなかったという事例もみられた。その生徒に関しては「勉強しなさい」と何度とも言われること自体が嫌だったという。生徒が自分の意思で学習機に向かうことができれば良いのだが、そうでない場合の勉強するよう促す方法として、あまり頻繁に言いつぎないことが挙げられた。そのような点も踏まえて保護者の方との連携を図り、生徒が勉強する環境を整えていくことが重要である。

5.3 親の言いなり

3つ目は親の言いなりになることについてである。これは良い面とそうでない面がみられた。まず良い面としては、親が勉強するように言うと素直に受け入れることである。親がそのように促すだけで家庭学習の時間を確保することができる。5-1でも述べたように、家庭学習の時間を使って授業の復習ができ、学習内容の定着にも好影響である。そうすることで、家庭学習をしないよりは学力の維持、向上が望める。そして何よりも、そのような経験が学習習

慣の定着につながり、自ら家庭学習の時間を確保するようになったという事例がみられた。対象の生徒はその影響で学力を維持、さらには向上させることができたという。

一方で悪い面としては、生徒が親の意見を鵜呑みにしてしまい、進路決定など本来自分自身の意見が尊重されるべきところで親の言いなりになってしまうことである。例えば、本人には受験をする意思がなかったが、親の意思で受験対策をするということが実際にみられた。親には受験の意識があっても子どもにはその意識がなく、受験対策を実施しても授業に身が入らなかつたり、宿題をやつてこなかつたりと思うように進まなかつた。そのような状況を把握していたが、うまく対応することができず、結局受験をあきらめるといふ事例がみられた。勉強するのは生徒自身であり生徒自身の意思が重要である。だからといってすべてを子どもに任せるのではなく、親子で意見を確かめる場を設ける必要がある。指導者はそのような場を提供したり、機会を作ることを促したりするべきであると考え

る。また、親の導き方が間違っているというのも悪い面として挙げられる。学校で習ったこと、先生から言われたこととは異なることを家庭で言われ、間違つたことを覚えてしまうという事例もみられた。間違つた方法に早い段階で気付くことができ、解決することができたというが、一度癖になると同じ過ちを繰り返してしまうようになるため、早期発見が重要であるという。そのためには日ごろから生徒とのコミュニケーションを図り、小さな変化にも気付けるようにしておく必要がある。

5.4 ルールが守れない

4つ目はルールが守れないということである。これは家庭でのしつけともつながる部分がある。学校・塾という場所におけるルール、授業の中でのルールなど様々なルールが存在するが、これらは社会に出るために必要なことであり、我慢しなければならぬこともある。授業の中でのルールに絞ると、各授業によってノートのとおり方や話し合いのしかたなど様々なルールがある。特にノートのとおり方に関しては学力に大きく関係するという。教員が定めた方法でノートをとっている生徒の方がテストでの正答率が良いという事例が挙げられた。数学における途中式は重要であると言われているが、途中式を丁寧に書く生徒と書かない生徒では、明らかに計算ミスの量に違いが生じる。そのような経験に基づいて設定されているルールも多く存在するため、やはり守るべきである。ルールが守れない生徒に対しては、いきなりすべてを求めるのではなく、最終的にそのルールが守れるようになるように、スモールステップで目標を立

てていくことが重要だという。その結果一部ではあるが、失敗を繰り返しながらもルールを守れるようになったという事例がみられた。そして、授業の中でのルール（ノートのとり方、グループ活動のしかたなど）については学力にも影響するものもみられたという。

5.5 収入と学力

5つ目は収入と学力についてである。2章で述べたように世帯収入と子どもの学力の間には、比例に近い関係性がみられた。この点について個別指導塾（生徒数：約80人）の講師にインタビューしたところ、「必ずしも収入が低いからといって学力が低いわけではない。」という答えが返ってきた。5-1と重なる部分があるが、片親ということもあり収入に余裕がないことをある程度でも知っている生徒は、ゆくゆくは国公立大学を目指して学習に対して熱心に取り組んでいるという。1コマの授業に対しての意識が高く、集中力も高い。そうすることで自然と学力を維持または伸ばすことができる。

一方で収入にある程度余裕のある家庭の子どもは、全員が全員そのような状況ではないが、与えられた課題をただこなし、1コマの授業に対する意識が前者ほど高くない生徒が多い。そのような生徒にやる気になってもらうために、スモールステップで目標を立て、ほめてあげることが大事だという。そうすることで少しずつ達成感を味わい勉強に対して少しは前向きに取り組んでくれるようになったという事例がみられた。

6. 家庭環境が子どもの学力に与える影響とその対処法のまとめ

5章では、家庭環境が子どもの学力に与える影響とその対処法を5つに分類してきたが、それぞれに対する対処法には3つのポイントがあると考えられる。まず1つ目は生徒とのコミュニケーションの重要性である。生徒から情報を聞き出す、生徒の少しの変化にも気付くことができなければ何の対処もできない。2つ目は保護者の方との連携である。生徒自身に話をして解決できれば良いのだが、それだけでは解決できないとき、どうしても保護者の協力を要するとき、保護者との連携を図り対応していかなければならないとインタビュー調査を通じて感じた。3つ目はスモールステップでの目標設定である。生徒が勉強するための環境を整えるため、生徒の勉強に対するやる気を出させるためには、いきなりすべてを求めるのではなく少しずつ確実にできることから目指していくことが近道なのではないかと感じた。

本研究によって挙げられた事例に対しての対応はある程度イメ

ージすることができたが、対応のしかたに正解はないと考える。実際、うまく進めることができた事例もあれば、思うようにいかなかったという事例もみられた。しかし、本研究でのインタビュー調査を通じて聞くことのできた、家庭環境が子どもの学力に与える各影響に対する対応の成功事例は、私自身の今後の人生に活かしていかなければならないと感じる。

7 今後の課題

本研究で挙げられた家庭環境が子どもの学力に与える影響に対する対処法をうまくいかなかった例も含めて整理しておく必要がある。そして、実際の場面で対応できるように準備しておかなければならない。しかし、本研究で挙げられた事例で対応のしかたとして成功していたとしても、これから起こり得る実際の場面でも成功するとは限らない。そのなかでも、この成功事例、失敗事例は実際に自分が対応していくなかでの参考となるため、なぜうまくいったのか、なぜ思うようにならなかったのかをまとめる必要がある。そして、本研究で挙げられたような事例に遭遇したとき、自信を持って対応できるように準備をしていきたい。

また、本研究で挙げられた事例がすべてではなく、ほかにも様々な影響がある。どのような状況に対しても対応できることが求められるため、それぞれの影響に対する対処法はもちろん、1つの影響に対しても複数の対処法を見つけていく必要がある。そのためには、6章で述べた、生徒とのコミュニケーション、保護者との連携を図ること、スモールステップでの目標設定という3つのポイントに加えて、周りの教員がどのような対応をしているのかに注目し、私自身の経験も踏まえながら対応していく力をつけていく必要がある。様々な問題が起こり得る教育現場で、成功や失敗を重ねながら、一人間として、そして一教員として成長し続けていきたい。

参考文献

- [1] 教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書
URL:https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kvoiku_kakusa/2008/kyoiku_kakusa_Chapter2_01.html (2019年2月6日最終検察日)
- [2] 学力の高い子ども、親の習慣や家庭環境に「共通の傾向」…文科省調査で判明
URL:https://biz-journal.jp/2018/10/post_25094.html (2019年2月6日最終検察日)
- [3] 子どもの学力は「母親の学歴」で決まる…?
URL:<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/56752> (2019年2月6日最終検察日)
- [4] 国立大学法人お茶の水女子大学,2018,『保護者に対する調査の結果と学力等との関係の 専門的な分析に関する調査研

究』,p13-22

URL:http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/10/1406896_1.pdf
(2019年2月10日最終検察日)